

# 学生が断水確認 アプリを開発

## 崇城大学

二〇一六年四月十四日  
熊本地震前震、十六日の  
本震のあの日から半年以  
上過ぎた。二度の大きな  
地震直後は、学生や教職  
員の安否確認、授業がい  
つ再開できるのか、建  
物、教室、パソコン、実  
験実習設備など、どのく  
らいの被害なのか、大学  
として機能できるのはい  
つになるのだろうか、ま  
た地震が起るのだろうか  
か、この修理や片付けは  
いつ終わるのだろうか、  
そんな不安や心配をかか  
えていた。ガスや水が出  
ない、また自宅も被災し  
ているなど日常生活も不  
便なまま、ほとんどの教  
職員は大学の片付けや今  
後の対応のために出勤し  
ていた。学生に対して  
は、安全に過ごしている  
か、心配ごとや不安で神  
経を病んでいないかとい  
うことを想定し、電話相  
談窓口を設置しました。  
最悪なことに就職に向け

ての企業説明会が盛んに行われている時期でもあったのでその対策も進めて学生に連絡し、企業には震災を考慮してもらえようように手配していた。

震災から二十三日目、どうか本学では五月九日月曜に授業再開を迎えることができた。その日は、おそらく不安をかかえながら登校する学生に元氣よく声をかけようとする定期的に行っている「朝の挨拶運動」（※学生に朝の挨拶で基本的な挨拶習慣やコミュニケーション力を向上させようという就職に向けての取り組みで、三年前から実施している活動）で出迎えることにした。ところがその朝は驚いたことに、どの学生も皆明るく元氣に「おはようございませう」と目を見て声をかけてくれた。このあいさつ運動がスタートしてからの三年間、これほど

元氣に積極的に声を掛け合う学生たちの姿を見たことがなかった。その日は、出席率も授業態度も大変良かったので、教職員一同は安心したが、学生たちのこの変化は何なのだろうという疑問もでてきた。そのうち段々とそれが震災による学生の“急成長”だとわかってきた。地震から授業再開までの間学生たちは、何を考え何をして過ごしていたのだろうか。

四月二十日頃から、各地の新聞には、本学の学生の記事が掲載されるようになってきた。「避難学生がボランティア」

「地元（熊本県外）で募金活動」 「SNSで呼びかけ駅前で義捐金募る」

「自分たち」でできること、仕分けに汗」など熊本県だけではなく県外の新聞でも学生がボランティア活動を自ら進んで行なっている様子が掲載されていた。また学長の元

には、避難所となっ学校の校長先生からお

礼状が届きはじめた。避難されているにもかかわらず、他の方々のために働いてくれている」「避難所のスタッフが疲れきっているところ、ボランティアにきてくれた」

「水を運んで分けてくれた」

（※地震のため断水が続いていたのだが、井戸水を利用している本学は、きれいな水が出ていた。学生がSNSに投稿し、近所の人や病院に水をわけていた）。避難所では、便利で快適に過ごせるように案を出し皆で役割分担を決めて実行したとのことだった。「人のために、役に立ちたかった」後にボランティアをしていた学生たちは口を揃えてこう言った。

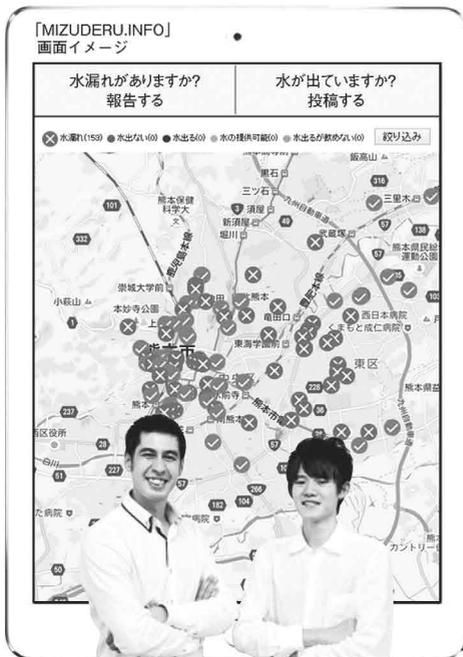
そんな中で理系の本学らしい活動があった。それは、水が入できる箇所が確認できる「MIZUDERU.INFO」アプリを開発した学生がいたことである。きっかけは情報学部教員で「地震直後には、どこで水が入できるか、情報がしつかり整理発信できていなかった。そこで、水がでいるかどうか市民の目で確かめて広く伝えられるウェブサイトに出来ないか」と考えツイッター上で声かけを行いました」というSNSでの発信からだだった。その呼びかけにすぐに反応したのが、当時二年生の情報学部の学生で、そのサイトをみてから三時間ぐらいでプロトタイプ（試作品）を作り上げ、一六時間後にはアプリを公開。つまり教員が第一声を発してからわずか一九時間後に

はアプリを作成・公開していたのだった。そのアプリの合計観閲数は四月十七日～五月末までに五万五六九五回にも達した。NHKの文字放送でもそのアプリの情報が流れていた。県民の皆が求めていた便利なアプリだったと考えられる。

公表から数日後、市の下水道局から断水アプリも作成して欲しいとの連絡があり、アプリは公共機関と連携し、断水機能も加わって更なる進歩を遂げた。「今後も地域貢献できるシステムをつくりたい」と語っていた学生は現在その言葉通りその能力を活かし、熊本県警察や熊本県サイバーセキュリティ推進協議会に協力しインターネット上の違法有害情報のパトロールなどを行い、未成年を中心としたサイバー犯罪の防止に取り組んでいる。そのための新しいアプリも開発した。震災体験が学生自身のポテンシャルを開花したと言える。

さて熊本の大学生は色々なところでボランティア活動に参加していた。本学も地震直後の授業再開までボランティアを希望する学生のために派遣のバスを出した。ところが地震直後、学生たちはボランティアセンターに自分の水や食べ物を用意して意気揚々と早朝から向かったにも関わらず、被災地に派遣されなかった。

その理由は、被災地が危険で道が寸断され警察、消防などプロの人員が行けなかったこと、もう一つの理由は、ボランティアセンターでボランティアに来てくれた人を心配する人が不足していたからである。比較的安価な市内の家や店舗の片付けは、その時運行していた公共交通機関を利用してしか指定された場所に向かうことができない。県外のボランティアの人々に行き方を説明しなければならなかった。市内の事情や地図がわかる地元人間が必要とされていたのだった。そのため何人かの学生はそのボランティアセンターでの采配役になった。その後、段々とリーダーとして任せられるようになった学生がいた。その学生は実家が鹿児島だったが、地震直後に避難した高校で、高校生がその避難所を運営していたことに刺激を受けて奮起し、一度も実家の鹿児島に帰ることなく熊本に残ってボランティアを続けた。もちろん実家の家族は心配していたそうだが、自身の意思を貫き、大学の授業が再開したあとも、週末や授業のない日はとにかくボランティアセンターでの活動にまい進していた。本人にその時の気持ちを尋ねたところ、やりがいを感じたことと県外から来る色々な人と話しをすることが楽しかったことだと話してくれた。この体験で人として重要なコミュニケーション力が培われていったに違いない。その後ボランティアセンターは市内から移転し、彼のボランティア活動は終わっていたが、先日ひょっこり現れ「震災でのボランティアセンターの活動のプレゼンを頼まれましたので資料収集しています」と。 「プレゼンが四日後でパワポもつくるので焦っています」と言う割には楽しそう。三日で資料を集めパワポをつくり、福岡でプレゼンするなんて、まるで凄腕の営業マンのようである。多くの苦しみや悲しみもあったが、この震災の困難は、学生を大きく成長させてくれた。まだまだ困難は続くが、このような素晴らしい成長ぶりに、大学は安心して将来が楽しみである。



情報学科 教員 情報学科 2年生

アプリ MIZUDERU.INFO